

観光文化

Tourism & Culture

VOL.

185

2007 September

財団法人日本交通公社

特集◎ 宮沢賢治とイーハトーブ

◆巻頭言

イーハトーブの風景 増田寛也……①

◆特集

- イーハトーブの揺りかご—宮沢賢治と岩手大学 大野真男……②
- 賢治を育てたイーハトーブの自然 瀬川 強……⑥
- 宮沢賢治とイーハトーブの人々 奥田 博……⑩
- 岩手の環境ルネッサンス・地域づくりに挑戦 谷村和郎……⑭

◆連載

I あの町この町 第23回

他言無用 — 佐賀県・有田町 池内 紀……⑱

II 明治のジャパノロジスト F. プリンクリーの「美しい国ニッポン」②

お雇いさんが時間外で辞書編纂してしまった 沢木泰昭……⑳

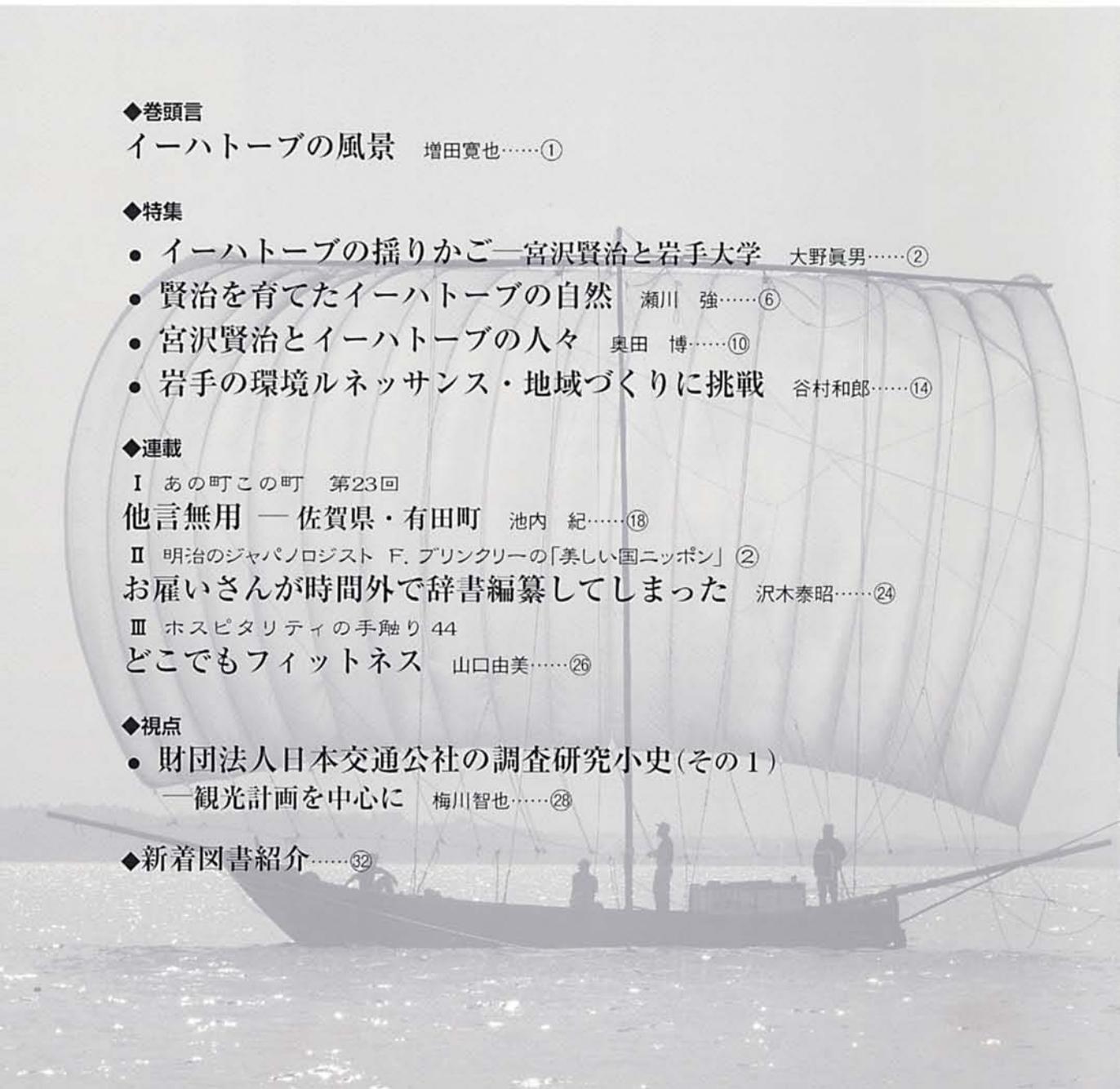
III ホスピタリティの手触り 44

どこでもフィットネス 山口由美……㉔

◆視点

- 財団法人日本交通公社の調査研究小史(その1)
— 観光計画を中心に 梅川智也……㉘

◆新着図書紹介……㉚





— 日本一のミニ村・旧富山村 —

山峡の絶壁を流れ下る天竜川。長野、愛知、静岡県境域一帯は、急峻な地勢と原生林で人間の居住を拒み続けた場所である。

愛知県北設楽郡富山村（現・豊根村）は戦乱の世を逃れてきた人々が住みついた隠れ里。十五年前、人口二百二人という日本一のミニ村であった。

耕作といえば桑畑と茶畑が急傾斜地にへばりつく形で存在する。

産業の興る条件をすべて否定した場所だけに自給自足の生活であった。それでも明治期は養蚕の最盛期を迎え、年間二十トンにも達した。大正期に入り雑木を材料に木炭、パルプ材の出荷が盛んとなり、千五百人の人口を記録した。しかし全国的な養蚕の不振と切り尽くした雑木不足で産業を失った。私が訪れたとき、村おこし行事の「とみやま人形劇祭り」に全国各地の人形劇団とはるかオランダから招待したドリス・ポラートさんの独演会が祭りを盛り上げていた。満々と水をたたえた佐久間ダムをバックに、茶摘み農婦の姿が美しい。（写真・文 樋口健二）

本年の四月末まで、岩手県の知事を十二年間務めた。この間、いったい何回新幹線に乗ったことだろう。恐らく、五百回は下るまい。地方の時代といわれながら、出張とはほとんど東京との間だけを往復することだった。

盛岡〜東京間、わずか二時間二十分。随分早くなたと思う。東京での仕事の帰りに、ぼんやりと車窓を眺めていると、春には新緑のまぶしさ、秋には黄金色の稲穂や紅葉などが目に映え、四季の移ろいを感じ、ほっと息をつく一刻でもあった。

東京生まれ、東京育ちの私にとって、子供のころ、毎年の夏休みに岩手の親戚の所を訪ねるのがとても楽しみだった。当時は、盛岡に行くとなれば一日がかりの大旅行となる。いつも私をとて可愛がってくれた祖父と二人だけの旅。祖父は車窓からの眺めが良いからと、わざわざ常磐線経由の急行列車を選んだ。片道十二時間、蒸気機関車で行くのんびりとした時代だった。トンネルの中では車内が煙で満たされ、スズで真っ黒になりながらやっと着いたその地は、東京とは全くの別世界。澄んだ空気に、重厚でゆったりとした、東京とは異なる時間が流れていた。

朝早くからカブトムシを集め、川に魚を追い、夜はホタル狩り。庄巻は、夜空にきらめく満点の星。プラ

イーハトーブの風景

前岩手県知事（現 総務大臣）

増田 寛也

ネタリウムの中の疑似空間ではなく、本物の天の川やいくつもの流れ星を見たのはこの時が初めてだった。首の痛くなるのも忘れて飽きることなく見つめた夜空。そこは『銀河鉄道の夜』であり、確かにイーハトーブの世界が広がっていた。

今年には宮沢賢治生誕百十一年。生前彼の業績は、世間からはほとんど無視されていたが、時代は巡り、賢治は二一世紀に最も重視される詩人になるだろうといわれている。否、詩人としてだけではない。童話作家として、農業技術者として、地質学者として、天文学者として、はたまた音楽家や宗教家として。

賢治という人は、人間のあらゆる可能性を体現し、一つひとつの専門的な領域を抜け出て、まさに普遍的な人間として昇華したのではないか。

それは、賢治の才能がなせるものか、あるいは、その時代と時代の空気が生み出した奇跡か。花巻、盛岡、岩手山、小岩井農場……。岩手県内各地を歩けば、賢治を育てた同じ空気が時空を超えて流れていることに気づく。

まさにイーハトーブの風景が現代に広がっているのである。

（ますだ ひろや）

宮沢賢治とイーハトーブ

地球環境問題や精神的な荒廃を抱える現代社会。多くの課題を鋭く指摘した宮沢賢治を生み育んだ「イーハトーブ（岩手県）」の世界への関心が高まっている。今号では、宮沢賢治の生誕百十一年を記念し、自然との交感を通じて彼が体現した岩手の精神風土を紹介する。

イーハトーブの揺りかご——宮沢賢治と岩手大学

岩手大学理事（地域連携担当）・副学長

大野 眞男

盛岡高等農林学校と

賢治の青春時代

盛岡高等農林学校は、冷害による飢饉に悩まされる北東北・盛岡の地に、日本で最初の高等農林学校として一九〇二年（明治三十五年）に設置されました。稗貫郡川口村（現・花巻市）の裕福な質屋に生まれた宮沢賢治が、子供時代、度重なる凶作に苦しむ近在の農民たちの惨状を目にしていたころのことです。

賢治は盛岡中学校を経て、一九一五年（大正四年）、十九歳の時に盛岡高等農林学校農学科に首席で入学します。そして一九二〇年（大正九年）に研究生として修了するまで、青春時代の多感な五年間をこの学舎で過ごし、その後の人生の貴重な指針を見いだしていくこととなります。伝記などを通して、花巻農学校や羅須地人協会での活動はよく知られていますが、賢治の学生時代はあまり知られていません。

啄木の影響もあってか、短歌の創作活動を始めていましたが、高等農林に入ると小菅健吉、保阪嘉内、河本義行といった学友たちと同人誌『アザリア』を創刊し、短歌・小文などを発表したことはよく知られています。賢治が短歌から創作活動を開始したことは少し意外な感じがするかもしれませんが、そのころの賢治短歌を一首だけ。六月のブンゼン燈の弱ほのははなれて見やる ぶなのひらめき
ブンゼン燈というのは、金属を炎の中に

入れて炎の色で元素の定性分析を行う炎色反応に用いる実験器具です。薄暗い化学実験室で鮮やかな炎の色に見られる賢治、窓外にはブナの梢を渡る風。

この実験室も、賢治の暮らした寄宿舎も今はありませんが、現在の岩手大学には当時の木々の植栽がそのまま植物園として残されています。そんな緑豊かなキャンパス全体がミュージアムとして整備され、市民の憩いの場として開放されています。高等農林時代の門や校舎も一部が保存されており、農業教育資料館、ミュージアム本館と



旧盛岡高等農林学校本館
(現岩手大学農学部附属農業教育資料館)

して活用されており、賢治の青春時代をしばし懐かしむことができます。

関豊太郎教授との出会い

賢治の在籍した農学科第二部には、そのころ、物理・気象・地質・土壤といった広範囲な専門分野を担当する関豊太郎教授が在任していました。関教授は、今からちょうど百年前の一九〇七年（明治四十年）に、「凶作原因調査報告、東北ノ凶作ト沿岸海流トノ関係ニ就キテ」という論文で、東北地方の冷害の原因が沿岸海水温の低下にあることを最初に突き止めた当代一流の農学研究者でした。

学業面において賢治は徹底的に関教授の薫陶を受けたようです。高等農林を卒業する際に執筆した得業論文（現代的には卒業論文）は今でも岩手大学の図書館に大切に保存されていますが、「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」と題するものです。岩手県内の土壌の腐植質におけるリン酸の性質に着目したもので、関教授の火山灰土改良の研究から派生したテーマと考えられます。

賢治と関教授との関係をさらに決定的に



宮澤賢治の恩師、関豊太郎教授
(岩手大学農学部附属農業教育資料館所蔵)

したことから、「稗貫郡土性調査報告書」における土壌調査があります。同報告書は稗貫郡長から関教授に依頼されたもので、賢治には初めはためらいがあったものの、研究生として高等農林に残ることを決めた後はこの土壌調査に没頭していきます。賢治没後に書かれた関教授による追想文に、
先ず同氏（賢治）にその基本となるべき地質調査の分担を頼んだところが、郷里のことだからと云って快く承諾し、
（略）同氏の家人は無理をして健康を損ね、また方が一怪我でもしてはと心配したということを人づてに聞いた。
（略）土性調査の基本となった地質調査は実に宮澤氏の義侠心とその実現との結晶と見るべきである。

と書き残しているように、献身的な姿勢で

故郷稗貫郡の山野を跋涉して調査に励んだことが分かります。この時の体験と知識の集積が、後年、羅須地人協会における肥料

設計、相談活動の基礎となつていきます。

関教授は、その後東京西ヶ原の農林省農事試験場に移りますが、賢治も上京時には関教授を訪問したり、関教授も病気の賢治を気遣うなど、二人の交流は終生続いていきます。

死の前年に書かれた作品に『グスコープドリの伝記』があります。絵本やアニメにもなりましたが、半ば自伝的なメッセージ性の強い作品です。森に暮らすブドリの一家は冷害による飢饉で離散してしまっています。たった一人で噴火や干ばつなどの苦難を乗り越え、ブドリはイーハトーブの町に出てクーパー大博士の学校を訪ねます。このクーパー大博士のモデルが関豊太郎教授であったことは、眼鏡をかけた風貌描写などでも推定されます。その後、火山局技師として、噴火災害の軽減、人工降雨による窒素肥料の施肥、最後は一命を捧げて冷害の再来を食い止めます。こんな壮絶なブドリの生きざまには、高等農林時代に関教授たちから学んだ科学的知見によって故郷の農

民たちに尽くそうとして、ついに病のため果たせなかつた賢治自身の願いや夢が仮託されているようです。

岩手大学における賢治の継承…

宮澤賢治センター

盛岡高等農林学校は、一九四九年（昭和二十四年）に師範学校や高等工業学校と一緒になつて岩手大学として再出発します。

二〇〇四年（平成十六年）に国立大学法人となつた際に、大学の理念として教育・研究に加えて社会貢献を掲げたことも、宮沢賢治の精神にさかのぼることができるところでしょう。当時と違つて農業振興のみでは地域社会の期待にこたへることができませんから、産官学連携を含めて広くイーハトーブの産業支援に努めています。また、環境問題への対応も含めてESD（持続可能な開発のための教育）に全学を挙げて取り組んでいるのも、賢治の心に連なるものと考えています。

その一方で、賢治にゆかりのある場所や品々を数多く有するキャンパスを活用し、賢治文学愛好者のための組織として二〇〇六年（平成十八年）に「宮澤賢治セ

ンター」を発足させました。賢治ファンにとつて聖地というもちろん花巻になりますが、賢治文学にとつて揺りかごとくも言うべき旧盛岡高等農林学校の地に、もう一つの活動拠点が生じたことになりました。農業教育資料館（旧高等農林本館）に隣接する、やはり賢治の時代からの建物「百年記念館」に、賢治センターは設置されています。

多くの方々の賢治への関心を結集することを目指しており、岩手大学の教職員・学生だけでなく、広く学外の賢治文学愛好家の参加を呼びかけていることが賢治センターの特色となつています。注文の多い料理店ではありませんが、「どなたもどうぞお入りください。賢治に関心のあることだけが条件です」と全国の賢治ファンに呼びかけています。毎月一回の定例研究会を開催して、研究発表、講演、賢治ゆかりの地の探訪など、盛りだくさんの活動を展開しており、現在登録会員数は約四百名にも達しています。詳細については、ホームページ <http://kenji.csisiwate-u.ac.jp/index.html> でご覧いただくことができます。

また、この賢治センターを足掛かりにして、岩手大学や他大学に所属する学生たち

が「全国宮澤賢治学生大会」を二〇〇六年（平成十八年）から企画・実施しています。賢治の作品は国語教科書などで有名になっていますが、賢治の実像については知っていないという意外と知られていない。そんな賢治をあらためて考え直す機会として、学生が主体となって、地域をも巻き込んで、若者たちによる新たな賢治像を全国に向かって発信していくことを目的としています。

第一回大会は昨年八月に開催されました。学生たちによる研究発表、賢治研究の泰斗・原子朗早稲田大学名誉教授の講演、賢治ゆかりの文学散歩などのプログラムで、芸術や情報関係の学生たち、また留学生も交

えて、百三十名のにぎやかな大会となりました。首都圏はもちろん、遠いところでは四国の大学からの参加もありました。今年の第二回大会は十月六日・七日というスケジュールで開催されることになっています。

平成十九年度は、これらに加えJTB社と共同事業で岩手大学シニアサマーカレッジに取り組みました。向学心に燃えるシニア世代を対象に、夏休み期間の二週間にわたって岩手に滞在していただき、郷土色豊かな文化や伝統、自然、産業などを題材とした講義を受講していただくという企画です。ずばりタイトルも「イーハトーブの学舎、賢治・啄木・遠野・平泉」。宮沢賢治も



平成 19 年度賢治学生大会ポスター写真

含めて岩手は生涯学習のコンテンツが実に豊富な地域です。まずは賢治の詩の世界や小岩井農場賢治ウォークを起点として、盛岡中学の先輩であり賢治にも影響を及ぼした天才歌人・石川啄木、賢治と同時代に柳田国男によって民俗学発祥の地となった日本の故郷・遠野、そして世界遺産登録を目前



平成 19 年度岩手大学シニアサマーカレッジ写真

にした浄土思想の理想郷・平泉。岩手大学は小さな地方大学ですが、賢治の思い出のぎつしり詰まった大学、イーハトーブのあまたの宝物に囲まれた大学です。機会があれば、ぜひキャンパスにいらしてください。

（おのおの まきお）

賢治を育てたイーハトーブの自然

写真家

瀬川 強

イーハトーブとは

宮沢賢治は一八九六年（明治二十九年）八月、岩手県稗貫郡黒川口村（現・花巻市）に生まれ、一九三三年（昭和八年）三十七歳という若さで短い生涯を閉じ、今年で生誕百十一年になる。

その短い生涯の中で賢治は、教師として、詩人として、童話作家として、農業技術者から農業実践者としてと、多彩な能力を開花させ作品として残している。それら珠玉の作品は時代を経ることにますます光り輝き、多くの人々に哲学的な示唆を与えてくれている。

作品の多くは、イーハトーブ（イーハトヴ、イーハトロボともいう）が舞台となつている。イーハトーブとは宮沢賢治が作った造語で、生前唯一出版された童話集『注文の

多い料理店』新刊案内の広告チラシに次のように記されている。

イーハトーブは一つの地名である。強いて、その地点を求むるならばそれは、大小クラウスたちの耕していた、野原や、少女アリスが辿った鏡の国と同じ世界の中、テパインタル砂漠の遙かな北東、イワン王国の遠い東と考えられる。実にこれは著者の心象中に、この様な情景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である。

そこでは、あらゆる事が可能である。人は一瞬にして氷雲の上に飛躍し大循環の風を従えて北に旅することもあれば、赤い花杯の下を行く蟻と語ることもできる。

罪やかなしみでさえここでは聖くきれいにかがやいている。

「実にこれは著者の心象中に、この様な情

景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である」と書かれているように、宮沢賢治が岩手県内を歩いているなかで実在とイマジネーションが交錯し、融合してできたのがイーハトーブの世界なのである。

賢治作品に出てくるイーハトーブの世界は、現代社会が抱える多くの課題——地球環境問題や精神的荒廃——を鋭く指摘している。本当の幸いを求めた宮沢賢治の思いは、詩や童話の中にちりばめられており、経済が優先する今の社会では、到底かないそうにもない、イーハトーブの世界である。

イーハトーブの住人

賢治の作品には、岩手の雄大で繊細な自然を背景に、さまざまなイーハトーブの住人たちが登場する。カタクリやオキナグサ



キツネもイーハトーブの住人。賢治作品にも多く登場する

など野の草花や、チューリップやダリアなどの園芸種。ナラやカシワ、イチヨウやブナなどの樹木。アリやカエル、ナメクジや沢ガニなどの小さな生き物から、タヌキやキツネ、シカやクマなどの大きな動物まで、多くの生き物たちが登場し、イーハトーブを形作っている。さらに、岩石や森や山にも命を吹き込み、それらイーハトーブの住人は銀河鉄道に乗って宇宙の果てまで旅することもできる。イーハトーブの住人たちが、賢治の感性を刺激するとともに賢治自

身をも育て、膨大な作品となったのである。

私も賢治と同じ花巻市に生まれ、イーハトーブの住人の一人であるが、二十年以上も前に国有林のブナの森が激しく伐採され危機感を抱いた。そこは、賢治の作品の一つである『なめとこ山の熊』の舞台になった所でもある。仲間と「花巻のブナ原生林に守られる市民の会」を作り、調査、観察会、イーハトーブの自然展などを行い、ブナの森の状況をイーハトーブの住民に知らせるとともに、貴重な森が失われないように県や営林署（現・森林管理署）、営林局（現・森林管理局）、林野庁、環境庁（現・環境省）に働きかけを行った。その結果、ブナの森は残るとともに、そこに暮らす多くのイーハトーブの仲間たちも同時に救われた。

イーハトーブの心象世界

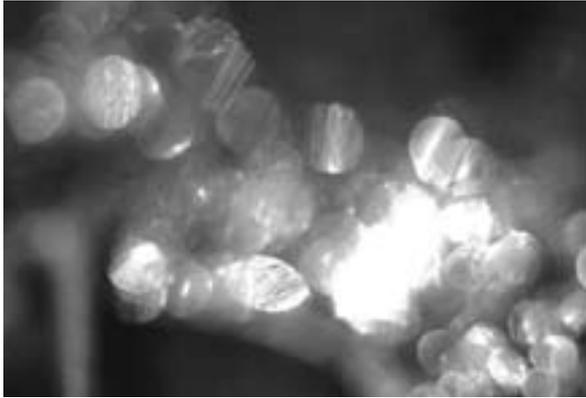
賢治は作品を自ら、心象童話、あるいは『春と修羅』の詩集に心象スケッチという言葉で表記している。実在した岩手の自然か



岩手県花巻市豊沢。「なめとこ山の熊」の舞台になった花巻の中山峠。伐採反対によりブナの森は残され、森で暮らすイーハトーブの住人たちも救われた

ら醸し出す心象世界は透明で光り輝き、賢治の作品は年を経るごとに輝きを増し色あせることはない。

賢治の心象世界を、愚かにも写真で表現しようと試みた。賢治の作品に出てくる言葉と交錯させながら探したが、いくら探しても心象世界は見つけることはできなかった。しかし、二十年ほど前の三月に北海道



岩手県西和賀町下前。イーハトーブの心象世界。ナメクジが這った跡に木漏れ日が射し、オパールのような輝きを見せる

を旅行したとき、屈斜路湖畔の氷解部に浮いた白鳥の羽を撮影中ファインダーに妖しい太陽と樹林が映り、白鳥の羽と融合されて見え何度もシャッターを切った。それが私の心象世界との出会いであるが、いくら探しても見えてこなかった世界が、偶然北海道で見えてからは次々と見えるようになってきた。

がある。賢治もなめとこ山のことを、「まるで青黒いなまこや海坊主のような山だ」と表現し、森全体を一つの生き物のようにとらえている。森の中を歩く私は森の体内にいるわけで、撮影をしていても、いつもどこからか誰かに見られているような気持ちになる。ナメクジが這った跡に木漏れ日が射し、まるでオパールの粉をまいたような輝きを見せる。急いで撮影しようとする、スーッと陰が落ちて輝きは消えてしまうと、森の中は光の移動が早く、まるで森の神経のようにも思える。

なかなかうまくとらえられなかった写真も、森から教えられ、撮らせていただいたていると思うようになってからは、心象世界がいろいろ見えてきた。そのとき森との一体感が感じられ、森を構成する一つの生物として認められたのではと思った。

写真はあくまで具象の世界であるが、イーハトーブの世界は具象を心象に昇華させる力を持っているようである。そのためには、今ある自然を清く美しく保つ必要がある。何だか訳の分からない写真でも、ああいいなあ〜と感じられるのは、根底に清い光や良好な自然が潜在しているからである。



撮影地：岩手県西和賀町廻戸。カタクリの花。カタクリはイーハトーブの春を彩る花。賢治作品にも出てくる

奥羽自然観察会と カタクリの会

賢治作品の中には西和賀町(当時湯田町、二〇〇五年に沢内村と合併)は出てこないが、とても自然豊かな所で、賢治が活動していたころのフィールド条件が色濃く残されている所でもある。二十年以上も前に『風の又三郎』の映画が岩手の地で作られたが、メインのロケ地は西和賀で行われた。それは、もう花巻周辺には当時の面影がなくなっ

ているとのことであった。現に、全国に同じような大型ショッピングセンターが建ち、賢治の足跡は観光地化している。

一九八九年、カタクリの花に誘われるようにして西和賀町に移住し、妻と二人で「カタクリの会」を結成した。カタクリの会は、多くの人々がイーハトーブの自然を理解し、そして大切にしような世界を夢見て、西和賀町での毎月一回の奥羽自然観察会開催を目的にしている。

一九九一年の一月から奥羽自然観察会を始めたのであるが、西和賀は名だたる豪雪地帯で、毎年二メートルを越す積雪となる所でもある。観察会当日は吹雪模様で、参加者はたったの二名だけであったが、厳しい寒さの中で生きている水鳥を多く観察でき、たくましく生きる勇気をいただいた気がした。カタクリの会の観察会は中止なしで、「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」どんな悪天候でも行っている。イーハトーブの自然から学ぶことは多様で、厳しさや辛さも同時に学ばなければならない。賢治の言う「罪やかなしみでさえそこでは聖くきれいにかがやいている」のである。会を重ねるごとに参加者も多くなり、多いときには六十

名も参加し、近隣市町村はもとより、宮城、東京など県外からも参加するようになってきた。奥羽自然観察会は今年二〇〇七年八月で二百回目を迎えた。第一回の時に、妻のお腹で吹雪の音を聞いていた長男は、高校一年生になった。

隔月発行のカタクリ通信は、参加者の多くが観察会の様子を伝え、県内外の四百名近くの方々に購読いただいている。寄稿してくださる参加者の感想や意見は、カタクリの会に多くの示唆を与え、通信は今年十二月で一〇〇号の発行となる。

永遠のイーハトーブへ

賢治作品の根底には岩手の豊かな自然があり、それらを大切に見守り、子孫に引き継いでいかなければならない。私たちの未来は、私たち自体がもたらす地球環境悪化によるさまざまな要因をつくり出すことではなく、また、兄弟である多種多様な野生生物を絶滅に追い込むことでもない。経済優先とグローバル化を進める社会は、ほしのままに氷砂糖を独

占し、きれいな谷川を壊し、多くの命を宿すブナの森を壊していく。劣悪な環境からは決して美しく新たな想像力は生まれてはこないだろう。そのようにならないために、私たちは地球の未来のために、豊かな自然と文化を次世代に託しておく必要がある。賢治の作品とともにイーハトーブは永遠でなければならない。(せがわ つよし)



岩手県西和賀町真昼ブナ指標林。「奥羽自然観察会」の様子。自然の中で育まれた子供たちは次のイーハトーブを担う

宮沢賢治とイーハトーブの人々

登山紀行家

奥田 博

私は学生時代に初めて早池峰山を訪れた。

昭和四十年（一九六五年）八月九日とノートに記してある。夜行列車に乗り、バスを乗り継いで岳集落には朝八時七分着とある。暑いなか、長い林道をひたすら歩いて、河原坊という場所までたどり着いた。そこに宮沢賢治の『河原坊』の木製の詩碑が立っていた。当時、宮沢賢治の詩といえば『雨ニモマケズ』しか知らなかった自分には、静かな、しかし衝撃的な出会いだった。

こゝは河原の坊だけれども
曾ってはこゝに棲んでゐた坊さんは

真言か天台かわからない

とにかく昔は谷がもう少しこつちへ寄つて

あゝいふ崖もあつたのだらう

鳥がしきりに啼いてゐる

もう登らう

河原坊（山脚の黎明）

初めて出会ったこの詩に感激したのでろうか。ノートには、この詩が写し記されている。それから何度、この早池峰を訪れたことだろう。冬にも何度か訪れた。しかし、何と言つても花の季節がもつとも山の輝く季節だ。固有種でエーデルワイスに似たハヤチネウスユキソウ、ナンブイヌナズナなどなど。流紋岩と呼ばれる特異な岩質が、この山の高山植物を多彩なものにした。

宮沢賢治の童話や詩などの作品には、多くの山名が登場する。あるときはイーハトーブの山であり、ある時は海外の山であり、ある時は想像の山であったりする。私は早池峰山に登つて、漠然と賢治の作品に登場する山を歩いてみたいと思つた。

賢治の作品にかかわりのある山を調べるには、当然ながら賢治の作品を読むところから始まらなければならない。賢治の作品

の山に登らなければならなかつたのである。これは、文学に素人の私には実に困難だが楽しい作業でもあつた。この楽しい作業と登山には十五年の歳月を要した。こうして出来上がったのが賢治の全作品に登場するイーハトーブの山々を登つた紀行『宮沢賢治の山旅』（東京新聞出版局）であつた。

岩手の山々を歩いてきた時に、多くの岩手在住の方々に知り合い、私にとって大きな財産になつた。その中でも個人的で印象的な方がたくさんおられた。

イーハトーブを描く画家の滝田恒男氏との出会いでは、詩画集『風の巡礼』で感動をいただき、さらには「経埋ムベキ山」の存在を教えてもらった。滝田さんは花巻市の北上川イギリス海岸から程近いところで、床屋さんを営む。その傍ら、賢治のかかわ



床屋さんの画廊

りの深い場所でスケッチを描き続ける。

滝田さんの本業は床屋さんであるが、一風変わったのは、二階が画廊になっている「画廊付き床屋」ということである。その二階は、宮沢賢治ゆかりの地を描いた自作の絵で埋まっている。その絵は、独特の雰囲気にあふれており、観る人を引き付ける。和紙に描かれた水彩のにじみ、絵の空間に入る賢治の詩、味わい深いその文字、絵の中に登場する孤独な一人の男。これが、この画廊に飾られた絵に共通する内容だ。

滝田さんは一九四一年、地元岩手県花巻市で生まれた。子供のころから絵が大好きであったが、最初にテーマ性を持って描き出したのは、岩手県に多く残っている南部曲り家であったという。スケッチブックを片手に、たくさんの曲り家を描いた。生まれたその場所に床屋を開業したのは、今から四十年前のことであった。

そして、宮沢賢治をテーマとして描き出したのは、一九七七年のことだったというから、かれこれ三十年になろうとしている。賢治と同じ場所に生まれた自分であるから、賢治のゆかりの地を訪ね、原風景を描き留めたい。その思いを強く抱いて以来、賢治のゆかりの地を描くことをライフワークとしてきた。

一九九三年十一月に、賢治ゆかりの地を描いた詩画集『風の巡礼』を出版した。それに続き九四年には花巻市の宮沢賢治イーハトーブ館で、九六年には同市宮沢賢治記念館で詩画展が開かれた。

滝田さんの登山歴は、三十五年前の秋田駒ヶ岳登山に始まる。紅葉があまりにも素晴らしくて感動した。この時はもちろんスケッチブックを持参して、紅葉の山々を描

いたという。以後賢治ゆかりの山に登り、そして描くようになった。

賢治は晩年「経埋ムベキ山」に三十二山を指定した。その三十二山に登り、その山々を描くことを続けている。滝田さんは、いろいろな角度から山を描き、多面的に多くのコースから登り、それを第二画集『風の巡礼』〜経埋ムベキ山〜として出版した。一九九七年のことだった。お経を千部埋める習わしにちなんで、その本も千部だけ作った。それが賢治に対するお礼だという。

滝田さんの話を聞いていると「賢治に描かせてもらっている」とか「賢治に感謝している」という言葉が出てくる。それを滝田さんはこう説明する。賢治を知らなかったら、イーハトーブの風景を見なかったし、人との出会いもなかった。賢治に教わったのは、絵を描くことで自分の生きる喜びを見いだしたことだ。もちろん絵を観る我々も喜びを与えてもらうわけだが。

今、自然はどんどん姿を消している。賢治の時代と同じ自然度は、もちろん今は望めない。滝田さんは、たとえ護岸工事された河川でも、伐採が進んだ山だとしても、まだ岩手の山河にはわずかだが自然は残っ

ているという。賢治の時代は、どこへ行くにもとにかく歩いた。滝田さんも同じように歩いて自然に接し、賢治の原風景を歩いて探し、いくつもその原風景に出合った。そして、自然の大切さも賢治に学んだという。だから「賢治に感謝し、賢治に描かせてもらい、賢治にお礼を言いたい」という心を常に持っているのだろう。

滝田さんの絵を観ていると、分かりやすい絵、親しみやすい字、ハツとさせられる賢治の文句。これをきっかけに、一人でも二人でも、賢治に親しみ、喜びを味わえる者が出てくればいいと思った。滝田さんは、いわば賢治の伝道師なのだから。

ナメトコ山。言わずと知れた宮沢賢治の『なめとこ山の熊』の舞台である。長い間、それがどこにあるのか分からなかった。花巻市在住の佐藤孝さんは、古文書で山を同定して、それが認知されたのだった。一九九六年九月発行の国土地理院二万五千分の一地形図に正式に名前が付けられた山である。

豊沢川の上流には、魅力的で賢治好みの山が連なっている。『なめとこ山の熊』の「な



『なめとこ山の熊』の舞台・ナメトコ山

めとこ山」も、この山域のどこかにある。多くの研究の結果、なめとこ山といわれる山は、標高八六〇メートルの中山峠北側のピークということになった。佐藤孝さんは、なめとこ山の場所を古文書から同定した方だとは思えない気さくな方だった。この周辺に住む熊の調査も行っている。花巻の奥に豊沢川が流れている。さらに奥には豊沢ダムが、流れをせき止めている。そこからは「なめとこ山」の候補地が見渡せる。橋の正面奥で鍋を引っくり返したよ



花巻の奥に位置する豊沢川上流

うな小さな八六〇メートルピーク。その左前方はるかな奥に頂上がちらりとだけ見えるのは、この山塊最高峰九二二メートルピーク。その左手に大きく伸び上がっていく九〇一メートルピーク。またはこの山塊全体を言うのだという説などがあつた。

ところが明治九年に時の知事の号令で作られた岩手県管轄地誌や、日本最初の格的地図、明治十七年の岩手県全図などを調べると、九二二メートル点や九六〇メートル点には別の名があることが分かった。さら

に追求していくと、「ナメトコ山…本村の北にあり…」という、一世紀を埋もれ尽くした感動狂喜の一文を発見したので。その山とは八六〇メートルピークで、「なめとこ山」は本当に小さな可愛い山だったのである。

なめとこ山の熊のことならおもしろい。

なめとこ山は大きな山だ。淵沢川はなめとこ山から出て来る。なめとこ山は一年のうち大てい日はつめたい霧か雲かを吸ったり吐いたりしてゐる。まほりもみんな青黒いなまこや海坊主のやうな山だ。

『なめとこ山の熊』の出だしの部分である。この後に出てくる情景描写で、かなり場所が限定されることは確かだ。賢治は、残念ながら「なめとこ山」の場所を明確には示さなかった。その山の位置をはっきりさせた瞬間に、その物語はリアリティを持つてくる。そして幻想性が失われる。私は、どちらかといえばあいまいにしておいた方がよかつたと思つている。

佐藤さんは、ご自身の研究冊子「賢治が見た花巻の自然」を正・続二編出されている。賢治の作品から山を同定する作業を、今も続けている。時々送られてくる、その新しい説によって登つた山はたくさんある。黒

森山、天ヶ森、片面森など枚挙にいとまがない。これからも彼の研究成果を持つて新発見の賢治の山を歩きたい。

ほかに湯田町在住のカタクリの会主宰の瀬川強・陽子夫妻には、賢治の自然に対する心を教えてもらった。今も私にとつては大事な友人であるが、残された誌面はわずかであり、お二人との出会いについては次の機会に譲りたい。岩手県通いを続けるうちに感じたのは、私は東北人であるということの再認識だった。

岩手をチベットと最初に呼んだのは賢治ではないか。もちろん、イーハトーブとしての理想郷という意味である。作品にチベット・ヒマラヤが登場するのは、時代背景を考慮すると特異なことである。これは賢治の宗教観によるものだろうが、情報をどこから得たかも興味のあるところだ。現在私は、賢治の作品に登場する世界の山を訪ねている。その場所を歩き終えたら、その時には紀行を一冊にまとめたと思つている。

岩手県を歩いて、その風土や、そこに住む人々に強く引かれる。私の岩手通いも回を重ねるうちに、岩手県にはたくさんの方ができた。これも、賢治が与えてくれた

最も大きな財産であると感謝している。これからもイーハトーブの山やワルトラワラの峠を歩き楽しんでいきたい。

けさの六時ころ　ワルトラワラの

峠をわたしが　越えやうとしたら

朝霧がそのときに　ちやうど消えかけて

一本の栗の木は　後光を出してゐた

(おくだ　ひろし)



イーハトーブの盟主「岩手山」

岩手の環境ルネッサンス・地域づくりに挑戦

みちのく岩手かつば村 村長

谷村 和郎

水の守り神

「盛岡かつば神さん」復活

盛岡市仙北町一丁目の北上川・明神川原に今年六月二日、江戸時代末期から水の守り神として信仰を集めていた「盛岡かつば神さん」が、環境首都・岩手、杜と水の都・盛岡のシンボルとして再建された、かつば神社のモニユメント（石像）としてよみがえりました。

江戸時代、暴れ川と呼ばれた北上川では、南部藩による舟運が盛んに行われていました。盛岡かつば神さんから下流二百メートル地点では、多いときで三十九隻の小繰舟で百〜百二十俵のお米を積んで、二十日から一カ月をかけて百八十九キロ下流の宮城県石巻港まで運ばれました。北上川は、舟運の要衝で盛岡の川の玄関口でした。舟運

の安全を祈る守護神、心のよりどころとして信仰されていたのが「盛岡かつば神さん」でした。かつば神社は一八六四年（元治元年）、同市仙北町一丁目の北上川右岸、明神川原に創建。盛岡藩士・川井鶴亭が約百八十年前に描いた盛岡城下鳥観図にも「浮島」と呼ばれる小さな島の中に描かれています。神社には、天下

泰平、国家安全、五穀成就、万民豊稔などを願う地域の知恵者十三人の連署のある板碑と金襴緞子の布に巻かれた子供を抱いたような形の御神体が納められていました。舟運隆盛や五穀豊穡をもたらす豊かな水を願う人々の

厚い信仰を集め、一九五四年（昭和二十九年）・旧暦六月十五日まで「河童祭り」が開かれていましたが、翌年の昭和三十年から三十一年にかけて行われた北上川護岸工事で、神社は取り壊され、その後、御神体は、千二百余年の歴史ある大宮神社に安置されました。



板碑の下部に13名の連署がある

水や環境を守る

環境ルネッサンスを实践

東京のかっぱ村で河童学を勉強していたころでした。中津川の中ノ橋のどんご石で、夏、水遊びをする子供たちに、「あの水で大

丈夫？」と気遣う、お医者さんでもりおか中津川の会（中津川の水の浄化を推進するボランティア団体）元代表の村井軍一さんのことが書かれた記事（岩手日報）を読み、岩手に「かっぱ村」を提案して、「みちのく岩手かっぱ村」がスタートしました。かっ



水分の神と記されている本殿。盛岡かっぱ神さんが納められている、大宮神社から発見

ぱの研究を始めて八年目の一九九八年（平成十年）九月、周辺のお年寄り（佐藤九十郎氏）からの情報を得て追跡調査をした結果、大宮神社の片隅から四十八年間眠っていた「盛岡かっぱ神さん」の板碑と御神体を発見しました。

かっぱ神さんの御神体の発見を機に、北上川の清流化と県内の緑化を進める市民団体「みちのく岩手かっぱ村」は、盛岡の地名に「かっぱ」の名称を付ける計画「かっぱ街道仙北町」構想を構築しました。構想では、明治橋から南仙北川久保に至る県道一六号の一・五キロと、明治橋から原敬記念館前を経て大宮神社に至る四キロの道をかっぱ街道仙北町として、かっぱの石像を街道沿いに設けるほか、街道以外の盛岡駅前にかっぱの像の設置、かっぱにちなんだ商品の販売を大通り商店街に働きかけることなどを企画しました。一方で、「歴史ある盛岡かっぱ神さんをなんとか元の場所に戻したい」と強く思うようになり、国土交通省に働き掛け、今年三月にかっぱ神社の再建が許可されました。今年初めに有志が集まり、同神社建設実行委員会を設立、今回再建が実現しました。命の水のシンボルで



金襴緞子の布に包まれた御神体

ある盛岡かっぱ神さんを再びお迎えし、水と杜の都・盛岡のシンボルゾーンで、子供たちに水や環境を守る大切さを教える活動を現在も続けています。

また、盛岡のシンボル・中津川は、サケが上ってくることで全国的に知られています。かつてはカジカも生息していた川です。今ではすっかり珍しくなったカジカを再び中津川に呼び戻そうと、二〇〇〇年（平成十二年）十月に市民ら約二十人で「中津川

かっぱかじかの会」を設立しました。会のメンバーは、カジカが卵を産みやすいような産卵床づくりに取り組んでいます。かっぱの頭に載っている皿にはきれいな水が必要です。カジカも清流にしか生息しないことから、杜と水の再生のための活動を続けています。



盛岡市仙北の明治橋付近に建立された「かっぱの石像」(上方は北上川の本流)

かっぱを通じて、

岩手のエネルギーを世界へ発信

みちのく岩手かっぱ村は、今年六月十五日(旧暦)「河童祭り」、八月十六日の先祖を送る風物詩「舟っ子流し」を開催し、十月には「みのり感謝の農業祭」、「舟運復活のイベント」、「子供の環境学習」

の各行事をそれぞれ行う予定です。このほか、「舟運文化の資料館」の設置も計画中で、かっぱをテーマとした観光拠点づくりを推し進めています。

二〇〇二年(平成十四年)八月一日には、全国の河童族・関連諸団体が盛岡市内の御所湖畔に集結し、「全日本河童サミット in 岩手」を開催しました。それ以来、世界水フォーラム二〇〇三年(平成十五年)を開催する京都で第二回サミット、第三回は「国際サミット in 台湾」と発展し、今年のみちのく岩手かっぱ村設立十周年記念のサミットを開催しました。

かっぱ村では、「頭のお皿が汚れ



稲束を担ぎ右手に鼻曲がり鮭をつかまえています

たら、おいらは大変 死んじゃうよ」(故加藤省吾さんから贈ってもらった「かっぱのお話」の一節をキャッチフレーズとして、きれいな水でしか生存できないかっぱも住める中津川を目指し、浄化活動に取り組んでいます。

また、盛岡市と姉妹都市提携を結ぶカナダ・ピクトリア市の元国際交流室長・ジェイ・ランジェル氏からは、「稲束を担ぎ・鮭(キ

ングサーモンを抱えた盛岡かつば」のモニュメントをビクトリア湾の散策路に設けたい」との申し入れがありました。かつば像の寄贈は、「水を大切にする心が伝われば、ビクトリアの海がきれいになり、海のものを選ぶレストランも繁盛するはず」ということで思いつき、現在準備中。日本の生んだかつばが海を渡り、水環境を思いやる心が世界に広がるのいいと考えています。これが実現すれば、「世界のかつばユニオン（連合）立ち上げのサミット」を計画しています。

人が集まる場作りから 交流が生まれる

人の集まる場づくりが、新しい文化を育んでくれます。私は、いろいろなジャンルの人々、異業種の人々との交流、コミュニケーションから異文化が持ち寄られて、新しい文化が生まれるという信念を持っています。

私は、株式会社博報堂に入社し、同社総合企画局に配属され、数十の会社・団体のCI、イメージづくりや販促づくりに取り組みました。三十三年前に盛岡の博報堂の立ち上げを任せ、新幹線開通前に盛岡市観光対策の提案の取りまとめ役をする機会

を得ました。現在もこの取り組みの延長線上で、盛岡の地域活性化のためのオーガナイザー役として、地域の先人たちの歴史・文化を活用して、新しい文化を育むために活動しています。

また、JTBの情報誌『るるぶ』の創刊号発表レセプションの際にディレクターを務める機会があり、それ以来、宮沢賢治を目標として、岩手の眠っている観光資源の開発や掘り起こしのほか、岩手のポテンシャルを引き出し、活用する挑戦を続けています。

東北地方を結ぶ

「みちのくかつば連合」づくりを

現在のスピード化社会とは逆行し、岩手県内のリアス式海岸二百キロを走る三陸鉄道の特色ある駅めぐりで岩手県の四季を楽しむ「スローライフツアー」の企画などを県を通じて、JRや旅行会社へ提案しています。また、岩手県から盛岡地方ルネッサンス事業として推薦・助成を受け、石川啄木が同級生十八人と行った北上川舟下りの修学旅行日記を参考にして、「舟運復興」を目指し、二〇〇〇年七月、四十一名が参加

して県南川崎村から石巻までの八十六キロを六時間半で舟下りする旅「石川啄木とともに行く北上川紀行」を実施しました。今後、自然豊かな川の流域、当時と変わらぬ景色をのんびり眺めながらの舟旅は、スローライフツアーとして多くのファンを集めそうです。二〇〇八年（平成二十年）には、二回目の舟旅を計画したいと考えています。

二〇〇〇年に清流のシンボル「かじか河童」を地元の石材屋さんから寄贈を受けて作り、今回は明治橋仙北二丁目「盛岡浮島かつばがみさん」を浮島の白鳥を守る会のメンバーと一緒に作りました。次は、二百六十年の歴史がある「夕顔瀬かつばざん」を夕市で賑わう材木町商店街の入り口に設置することが決まっています。また、遠野市の本田市長の了解を得て、今回建立された盛岡かつば神さんのある明治橋から遠野街道に入る国道三九六号線を「盛岡・遠野命の水かつば街道三九六号線」と名付けることも計画しています。穀倉地帯・東北で、「命の水かつば街道」が続々誕生することになります。いよいよ東北地方を結ぶ「みちのくかつば連合」づくりがスタートします。

（たにむら かずお）



連載 I
あの町この町
第 23 回

他言無用

佐賀県・有田町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀

(イラスト＝著者)

焼き物の町有田、なかでも皿山通りはたのしいところだ。ゆるやかにうねった一本道の両側に、黒と白を基調とした落ち着いた家並みがつづいている。背後に低い山々が控えていて、舞台を引き立てる緑の書き割りといったものだ。

おおかたが妻入りの二階建て。屋根の三角が見える側を通りに向けたスタイルで、一階に小屋根がついている。その下が玄関兼ショーウィンドウ。それぞれ工夫をこらしてあって、通りを歩くだけで有田磁器の逸品や変わり種、大胆なデザインによる最新作と対面できる。

店構えが風雅なのは長い歴史を経てきたからだ。十三代今泉今右衛門、藤右衛門、源右衛門窯、晩香窯、丸田錦峰堂、香蘭社、陶舗白峰堂、銘品堂、福右衛門窯、岩尾対山窯……。当今はやりのカタカナ名などいっ

さいない。左衛門がなくて右衛門系ばかりなのは不思議だが、格調ある漢字が軒の看板やノレンにおさまっている。ここでは郵便局前のポストの上に古伊万里人形がのこっている。もつとも、珍しい魚の焼き物と思っ

てよく見ると、レッキとした鮮魚店で、タイやヒラメが並んでいる。かたわらの飾り窓に主人の自慢らしい大壺の飾ってあるのがほほえましい。

まずは陶山神社にお参りした。皿山通りのほぼ中央、山の斜面にせり上がるかたちで鎮座している。石の大鳥居をくぐって石段。ここまではふつうの神社と同じだが、いちど石段が切れて線路をまたぐのが風変わりだ。JR佐世保線がぶしつけにも境内を突っ切っているせいである。

「踏切危険」

つづけて韓国語と英語とドイツ語で警告

してある。どうして急にドイツ語になるのか首をひねったが、ドイツのマイセンは磁器窯で知られており、有田町と姉妹都市か何かになっていて、ドイツ人の来訪があるのだろう。

あらためて石段をのぼると、こんどは磁器製の鳥居に迎えられる。明治二十一年（一八八八）、稗古場奉納とある。焼き物製の鳥居というのも珍しいが、きつと有田ではお手のものだった。白磁の生地に天然呉須こすずによる淡い唐草文様がほどこしてある。

製造人 岩尾 久吉
角物細工人 金カ江 長作
丸物細工人 峰 熊一

「角物」「丸物」といった言い方をはじめて知った。たしかに鳥居の柱は丸いが、上ののつたソリと中央の額は角はついている。「細工人」とはいかにも職人言葉らしいのだ。



陶山神社の磁器製の狛犬

ここでは左右の狛犬も、巨大な水瓶も、本殿の欄干も磁器製である。裏山に陶祖が祀られている。李參平といって朝鮮渡来の人。元和二年（一六一六）、皿山通りの外れの泉山で白磁石を見つけ、天狗谷というところで磁器を焼いたのが有田

焼の始まり。二十年あまりのちの寛永年間には、登り窯十三、窯元二五〇戸と記録にあるから、すでに焼き物の里ができて、諸々方々の煙突から勢いよく煙りが立ち昇っていたのだろう。

正保四年（一六四七）、陶工柿右衛門が

赤絵付けに成功。三年後、はじめて有田焼一四五点が長崎から輸出された。万治二年（一六五九）にはオランダ商館と陶磁器五万六千七百個の契約を結ぶ。焼成に成功して四十年あまりで、はやくも有田磁器は世界のブランド品の声望を確立したわけだ。

陶山神社を出て皿

山通りに入る角のレング造りの建物に、小さく「有田金融協会／有田手形交換所」の標識がとりつけてあった。長い歴史のなかで、窯元をはじめ陶磁器商人のあいだに商慣習ができあがり、独自の有田金融界がいまも財務をになっているのかもしれない。

通りに出る三叉路が札の辻。角から二軒目の異人館が異彩を放っている。明治期の洋館といわれるもので、明治九年（一八七六）の建築。

木製の円柱が二階のバルコニーを支え、淡い黄色の壁に白い窓。ただし屋根は瓦葺きで、鬼瓦つきの小屋根がのっている。肥前の大工円宗藤右衛門の作とあるが、ハイカラスタイルを注文され、見よう見まねでつくりあげたのではあるまいか。

有田焼は肥前鍋島藩の庇護を受けていた。外国貿易は藩にとつて大きな収入源である。幕末のころ藩より「一枚鑑札」を受けて輸出を独占していた人物は、「ヤリ手」といわれるタイプだったにちがいない。独占権を手長崎の出島に商館を設け、横浜、上海、ニューヨークに進出した。外国からバイヤーが買付けにやってくる。自分の力のほどを誇示するように、陶山神社と目と鼻のところにへ宿泊と接待用の館を建てた。

異人館のまん前に、アール・デコ風の装飾をもった、古風なレンガ造りの建物がある。深川製磁の本店であつて、通りの角、また窓ごとに入ったステンドグラスがあざやかだ。

初代深川忠次の創業による。皿山通りを少し下ったところに、やはりアール・デコ調の様式美をもった建物があるが、こちらは忠次の父、深川栄左エ門が中心になって興した香蘭社の建物である。

世の変化とともに有田窯業の大きな変化

が建物のつくりからも見てとれる。明治の廃藩置県により鍋島藩の庇護を失った。もはや藩公から「一枚鑑札」をいただく時代ではない。深川栄左エ門は有志とともに西欧の「カンパニー」にあたる香蘭社を立ち上げた。次男の忠次は香蘭社から独立して自前の会社を設立。

ともに万国博を強力なプロパガンダに活用したところが興味深いのだ。一つには自分たちの商品に絶対の自信があつたのだろう。さらに当時、西欧社会にあつて一世を風靡していたジャポニズムの流行をよく知つていた。香蘭社、また深川製磁の出品した華麗な金欄手の大花瓶は、パリ万博ほかでつぎつぎと賞に輝いた。となるとわざわざ異人館で接待しなくても、直接パリやロンドンから注文がくる。明治の若い有田人はいち早くグローバル商法を実現して、その証しのように美しいアール・デコの店づくりをした。

ドイツのマイセンでも、国王の庇護のもとに磁器製作が始まった。マイセンは当時、ザクセン国の町であつて、ザクセン国王はアウグスト公といつた。きっかけは中国磁器だったようだが、公はひと目見て魅了され、大金をはたいて買いあさつた。そのためザク

クセンの財政が傾いたというから、よほど金にとめをつけなかつたのだろう。

マイセン磁器の祖とされるヨハン・ベトガーは、世に知られた錬金術師だった。アウグスト公は力づくでマイセン城につれてきて、磁器の製作を命じた。錬金術はそのころの先端科学であつて、いわば高級技術者をかっさらつてきたわけだ。

十年かかつてもベトガーには磁器の秘密がわからない。理論的には可能なはずなのに、釉薬と土を溶け合わせるための高温の窯をつくるのができない。王からは矢のような催促がくる。ついにはベトガーに別の小部屋の用意があることを通告した。つまりは拷問室のことである。

一七〇八年、最初の赤い磁器、つまり赤器を献上。翌年、白磁に成功した。マイセンに王立の窯がつけられ生産を開始した。ベトガーの死後、ヘロルト、ケンドラーといった優れた陶工が出て、マイセン磁器は世界的な名声を確立。ザクセン国の財政はマイセン窯によつて大いにうるおつた。アウグスト公はその収入で日本磁器を買い集めた。「古伊万里」とよばれる古有田の名品がマイセン国の首都ドレスデンにどっさりあつて、コレクションを納めた宮殿が現在はい「日本館」とよばれている。

ドレスデンとマイセンを訪ねたときのことを思い出しながら、ぶらぶらと有田の町を歩いていた。裏手に川が流れていて、表通りの旧家が川ごしに背後からながめられる。

世界に名だたるマイセンよりも有田のほうが半世紀ばかり早く磁器を生み出した。李參平といった渡来の高級技術者のはたらしきによる。泉山で見つけた白磁石が大きな要因だったというが、はたしてそれだけだろうか。雪のように白い生地の有田焼が世にあらわれるには、さらに多くの「物語」があったのではなからうか。

裏手の報恩寺に興味深い碑を見つけた。百婆仙という女性にまつわるもので、李參平とともに朝鮮からやってきた陶工深海宗伝の妻とある。はじめ武雄領主のおかかえだったが、夫の死後、一族を引きつれ有田に移り、川沿いの稗古場に窯をつくってマニファクチャー式に磁器の生産をはじめた。明暦二年（一六五六）、九十六歳で死去。

知恵と統率力のあるゴッドマザーがいたわけだ。もともと深海宗伝ほかの陶工たちは、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、領主たちの帰国に従って来日したといわれるが、腕に覚えのある技術者集団が、どうしてわざわざ日本に渡ってきたのだろうか？ とりわけ

九州の大名たちは磁器が大いなる宝であることをよく知っていた。アウグスト公が錬金術師を、力づくでつれてきたのとよく似た事情があったのではなからうか？

皿山通りは「伝統的建造物保存地区」に指定されており、白と黒を基調とした建物群は保存と再生を兼ねている。新築、改築にあたり、家並みの統一をはかってきた。そのため魚屋も駐在所も陶園と見まがう建物に入り、奥でねじり鉢巻のおや



皿山通りのショーウィンドウ

じが刺身をさばいたりする。

「鍋島藩 辻赤絵具 古伊万里絵具
製造処」

萌黄色もえぎのノレンに白抜き文字。わきに板書して品目が書いてある。

「二子相伝 辻唐石

赤・黄・萌黄・群青・紫・釉薬田灰類・
その他」

有田の魅惑の秘密だろう。「二子相伝」であって、親から子につたえ、他にもらさない。土、絵付け、うわぐすり、焼き、彩科技術それぞれが窯かまごとにちがう。柿右衛門の赤はいまなお独自の赤であり、同じ藍色をつかっても窯かまごとに少しづつちがう。香蘭社の金、深川製磁の白さは、ほかでは生み出せない。少なくともその建て前になっている。秘伝とか宗家、本家のシステムは日本文化に独特のものであって、いつさい情報公開をしない。

マイセン磁器の化学的合成は「アルカナム」とよばれ、国家秘密とされていたが、のちにベトガーの弟子がひそかにウィーンの宮廷に売りわたした。

以来、マイセン窯は統一され、いつさいを公開している。製品はただ一つのしるしをおびて世に出ていく。世界に知られたトレードマークであって、交叉した細い剣のかたち、

色は青。

「まあ、一子相伝も悪くないか」

そんなことを考えながら歩いてきた。たしかに色、焼きの微妙なところは情報とはなりにくい。化学の公式や数式によつては伝えられない。

表通りの法元寺に祈禱札が伝わっている。昔は火入れをすると、あとの工程は偶然にまかせるしかなく、窯出しをするまで出来、不出来がわからない。失敗を「ふがま」といって、三度ふがまをすると窯元は夜逃げをした。

神仏に祈るしかなく、窯入れには寺に祈禱をたのみ、そのお札を竹につけて窯かまに添えていた。

香蘭社古陶磁陳列館、深川製磁参考館、有田陶磁美術館、柿右衛門窯古陶磁参考館、源右衛門古伊万里資料館、今右衛門古陶磁美術館……。

町を歩くだけで目の修行ができる。有田焼の通になれる。ほんとうはショールームで、気に入ったのを一つ、二つと買い求めるのが礼儀だろうが、こちらは物欲、所有欲といったものがゼロにちかい。ひたすら目の保養をさせていただくだけ。

そんな不粋者が注文をつけるのはおこがましいのだが、どうも展示や説明がキレイ

ごとだけに終始しているのではあるまいか。九代、十代にわたる技術と試みであつて、その店の失敗や試行錯誤、祈りを託した工程のこと、さらには独自の色や艶や意匠を実現するまでのことをもう少し知りたい。それを伝えても、べつに「二子相伝」を損なうまい。

百婆仙といったフシギな名前のゴッドマザーが、どのように陶工たちを統率したのか。鍋島家という有力大名が全有田を傘下に収めるまでの経過。「一枚鑑札」の豪商のこと。明治の世の到来とともに Arita Porcelain をひっさげて世界へ出ていった冒険家たち……。知りたいことがいっぱいある。

さらにいうと陳列が古陶磁に終始しすぎているのではなからうか。そのため、二つ、三つと訪ねると、どこも似たりよったりなので退屈してくる。過去の逸品だけでなく、いまの社会に機能している作品もまたそれなりの名作というものだ。かつて香蘭社は明治政府の工部省電信局の求めに応じ、碍子がしの試作にとりくみ、きわめて良質の製品を生み出した。電柱についての絶縁体の白い磁器は、日本の近代史に大きな貢献をした。それは誇つていいことなのだ。そんな意味で、たとえばセラミックと現代の有

田との関係はどうなのだろうか？ 有田磁器は四百年前に生まれた、きわめて高性能のセラミックにちがいないのだ。

一つ珍しいのといきあった。戦争中につくられた磁器製のおカネ。戦時の金属不足から大日本帝国銀行は磁器の貨幣を考え、有田に発注したらしい。実用にはいたらなかったが、昭和十九年（一九四四）、たしかに土製の「銅貨」試作品が誕生していた。

ついでながら、当時からさかのぼることほぼ二十年、ドイツは第一次大戦後、古今未曾有の大インフレにみまわれ、国庫が底をついた。ドレスデン銀行はマイセン窯に注文して磁器による貨幣をつくり、一時しの



妻入りの家並み

ぎをした。歴史はくり返すものである。

緑の山を背にして美しい町並みがひっそりと眠っている。さぞかし多くの物語もち、語り出すと千夜一夜ができるだろうが、しかしこのシエラザードはただじつと口を

つぐんでいる。妻入りの三角が「他言無用」と口に指を添えたように見える。昼下がりの涼しい風が吹きわたるなか、そんな三角顔が整然と並んでいた。

（いけうち おさむ）



連載Ⅱ
明治のジャパノロジスト
F. ブリンクリーの
「美しい国ニッポン」②

お雇いさんが時間外で辞書編纂してしまった

旅行ジャーナリスト

沢木 泰昭

西欧向けの本格的な日本旅ガイドは『日本旅行案内 (A Handbook for Traveller in Japan)』が原典と言ってよさそうです。

一八八一年(明治十四年)にマレー社(ロンドン)から刊行されました。英国外交官アーネスト・サトウとA・ホーズ中尉の共著『中部・北部日本案内』などをベースにB・チェンバレンらが編集し、版を重ねた人気書です。

チェンバレンには他にも日本紹介の著作があつて、『日本事物誌』の一項目で「お雇い外国人 (Foreign Employees in Japan)」を次のように解説しています。

この国には新しい人物が登場した……。お雇い外国人だ。彼らは新日本の創造者である

「新日本の創造者」は少々、自大だけれど、彼自身がお雇い外国人だから、こんな解説もアリなのでしょう。『中部・北部』のホーズ中尉もこれまた、お雇い組でした。

意識はバックパッカー？

フランシス・ブリンクリー。お雇い経験者です。あえて経験者と呼ぶのは、一時期、お雇いリストに名を連ねていたということ。お雇われ目的で来日したではありません。

ならば、来日の動機や目的は何か。実は、これがはつきりしません。二十六歳の時に英国の「駐日公使館武官補および守備隊長」として、香港から派遣されました。志願ではなく派遣です。日本赴任を命令したのは第六代香港総督リチャード・マクドネル。ブリンクリーの従兄弟です。

不穏なダブリンからロンドンに上京し、従兄弟を頼って香港へ。「行け行け」の植民地政策の波に乗り、さしたる目的や明確な夢もなく、ともかく極東へ……。「何でも見てやろう」流バックパッカーのような青年だったのかもしれない。

日本上陸は維新前夜の二八六七年(慶応三年)九月。P & Oのスタダ号で横浜へ。

翌日は公使館仲間と騎馬で山手辺りを走り回っています。二本差しの武士に出会ったので同行者が短銃で空砲を放ったなどと興奮、たわいない浮かれた着任ぶりです。

ブリンクリー自身「日本滞在は長くて数カ月」と思っていました。それが以後四十五年間、一度の北京短期旅行を除いて一歩も日本から離れない暮らしが始まることになりました。

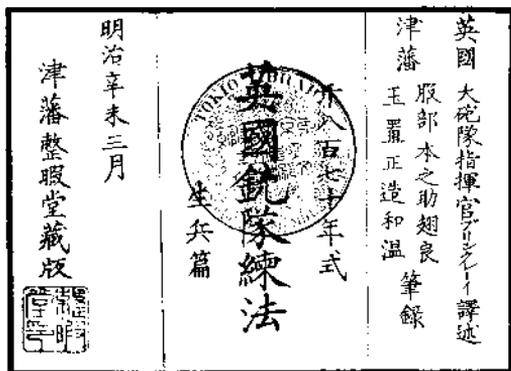
お雇いで三度の転職

上司は幕末史でおなじみのヘンリーパークス。二代目の駐日英国公使で、薩長を支援し、維新に影響を与えたタカ派外交官です。パークスが開港場の調査で敦賀を訪れた際に福井藩松平家から砲術教師の派遣を依頼されたのが契機になって、若きブリンクリー

に白羽の矢が立ったようです。ロンドン時代に砲術を学んでいたことがパークスの知るところとなって紹介されます。

これが、お雇い外国人としてのスタート。寺の境内で砲術指南をしますが、海軍省からお雇いの声がかかって明治四年には任期中途でお雇い替えに。声をかけた一人が勝海舟といわれています。海軍省の第二号お雇いとなって、水兵本部（後の海軍士官学校）設立の教官を務めます。

明治十一年までの六年間、プリンクリーは英国式の士官教育制度とカリキュラムを日本海軍にもたらしめます。続く十一年七月から二年半は三度目のお雇い。今度は伊藤



プリンクリーは来日四年目には口述本『英国銃隊練法』を
発刊した（国立国会図書館蔵）

博文の建議で開校した工部大学校（東大の前身）の数学教官です。

ちなみに、工部大学校での月給は三五〇円。米一石七〜八円の時代で、高級官僚をしのぐサラリーでした。この破格な給与と有り余る任務外の時間、そして日本（人）への人一倍の好奇心がジャパノロジスト、プリンクリーを生む原動力になります。

落語、講談で日本理解

総数八千といわれるお雇い外国人の多くはご用納めで早々に帰国しています。その代表格が「少年よ、大志をいだけ」のクラーク先生。任期八カ月でそそくさと帰国です。

プリンクリーは居残り組です。その引き金になったのが、来日直後から日本語を積極的に体得したことによります。上司パークスや秘書官サトウらが舌を巻く日本語上達で、これによって勝海舟、大隈重信ら日本側の重鎮たちとの関係も深まります。

あり余る時間には寄席にも足を運んで、落語・講談で庶民から耳学問。「日本語が分かるガイジンさん」として注目され、来日四年目の明治三年には口述本『英国銃隊練法』を津藩から上梓しています。

海軍省お雇い中の明治八年には『語学独案内』（458ページ）を独自で編纂。読めばひ

とりでも分かるという、日本語による本格的な英語辞典です。

……西欧人は自国文字で英語を学べるが日本はそうもゆかず、英語を学ぶことが非常に難しいとして、「日本語ヲ以テ其用法ヲ解明セシ良書ニ乏シケレバ（中略）患ヲ除カント欲スル耳」と発刊趣旨を述べています。同書は明治末期まで英語入門書としてロングセラーになります。

極東のニッポンを回転軸に

幕末維新の有名人、アーネスト・サトウ、チェンバレン、イザベラ・バードなどが西欧向けに日本旅行情報を発信したのに対して、プリンクリーは極東ニッポンを回転軸にして日本人向けに西欧の歯車を組み込んだ人でした。それは、お雇いの任務を超えた、日本人への好奇心がなせる、時間外ボランティア活動でもありました。

好奇心を満足させる手段としての日本語理解。これが、脱亜入欧をもつてよしとする日本人に重視・重宝され、外国人仲間からはやかまされる要因にもなります。

やがて、お雇い外国人を体験したプリンクリーは威風堂々、独り歩きを始めることになります。

【以下次号】

（さわかき やすあき）



連載Ⅲ
ホスピタリティの
手触り44

どこでもフィットネス

旅行作家

山口 由美

健康ブームに
乗り遅れることなかれ！

その昔のぶら下がり健康器に始まって、最近ではバランスボール、そして「ビリー・ザ・ブート・キャンプ」と、しばしば大ブームとなつては、狭い住宅を占拠してきた健康器具。「ビリー・ザ・ブート・キャンプ」に関しては、フィットネスシューズを履いて、DVDを見ながらあんな激しい運動のできる居住空間が、日本のうさぎ小屋のどこにあるのかと揶揄されながら、それでもブームはヒートアップしたのだった。

とはいえ、熱しやすく冷めやすいのがこの手のブーム。そろそろブックオフに並んでるころに違いない、こっそり買いに行こうかと考えている。半分馬鹿にしながら、やっぱり気になるのである。

健康ブームということが言われ始めて、どれほどになるだろうか。そうした状況は、ホスピタリティ産業にも色濃く影響を及ぼしている。この十年余り、世界各地のあらゆる宿泊施設が、時代に乗り遅れまいと、なかば強迫観念にかられながら必死に導入してきたのが、いわゆるスパ（ホテルでいうスパとは、温泉ではなく、すなわちサウナなどの温浴施設とエステの合体したもの）であり、フィットネス施設だったように思う。都市ホテルはもちろんのこと、フランスのシャトーホテル、果ては日本の旅館やアフリカのサファリロッジに至るまで、もはやこういうロケーションだから、業態だから、「なくてよい」と許されるものではない。

特にアメリカでは、肥満は貧困と墮落の象徴とされるようになって久しい。おのずとアメリカ人の富裕層を狙うマーケットでは、彼らの日常のエクササイズを支援なく遂行させるため、フィットネスジムを完備させなければならぬ。「ジムがないと、ハリウッドからゲストが来てくれないの」と、嘆く声を各地のリゾートで聞いたことがある。このころでは、ヨーロッパのシャトーホテルでも、歴史的建造物だからジムがなくていい、ということにならないらしい。南仏のシャトー・サンマルタンという、かつてテンブル騎士団の修道院だったホテルでは、白壁のアーチと赤い瓦屋根の美しい中庭に突然、フィットネスのマシンがあつて驚いた。

同じく南仏の、中世そのままの城壁が村になつていゝエズでは、その切り立った岩肌張りつくようにして、古い建物を連ねたホテル、シャトー・ド・ラ・シエーヴル・ドールがある。ここは、海を見下ろす絶景を望むようにあつた。



モナコのメトロポールホテルにて。真っ赤なフィットネスジム

絶景に向かってランニングマシンで走る、というのには、高層ホテルでは、もはや定番のアイデアである。だが、歴史あるクラシックホテルでは、眺めのいい場所は、すでに客室やレストランに占拠されている場合が多い。そうになると、増設するスパやフィットネスジムには、窓のない空間しか残され

ていない。それでもホテルの経営陣は、死になつて頭を絞るのである。

モナコのメトロポールという名門ホテルでは、どうせ壁に囲まれた空間ならばと、ランニングマシンの前方の壁を真っ赤なライトで照らすという大胆な作戦に出た。

「赤はエネルギーがみなぎる色ですから」

まじめな顔でそう説明されても、真っ赤なフィットネスジムにはびっくりする。

それにしても、映像として最もシユールだったのは、やはりボツワナのサファリロッジ、モンボキキャンプのフィットネスジムだろう。

目の前に広がるのは、野生のゾウやライオンが当たり前を現すサバンナ。その風景を借景に、草ぶきの屋根と丸太の柱を組んだ小屋が建ち、その中がフィットネスジムになっているのだ。マシンやバーベル、さらにバランスボールとヨガマットまで完備している。こんな所でトレーニングなんかしなくても、と思うが、体の鍛錬を休むことのできない人たちを相手にする

のが、昨今のラグジュアリーホテルというもののなかもしれない。

ところでヨガマットといえば、これを部屋の備品として常備しているホテルがあった。マンダリン・オリエンタル東京である。

なんでもマンダリン・オリエンタルの幹部たちの間で、ヨガがブームとなり、誰からともなく、部屋の備品に欠かせないという話になったらしい。

私はヨガはやらないが、ストレッチはやる。そのため、ちよつと便利だと思つた記憶がある。もつとも、旅先でも必死にやるほどではないのだが……。

最近、東京のホテルに関するアンケートがある雑誌の編集部から来て、ほんの余談のつもりでそのことをコメントしたら、誌面に採用されたのが、ヨガマットの話で驚いた。

やはり、それが時代の気分なのか。

あと何十年か後になったら、二一世紀の初めとは、ホテルや旅館の施設における大変革期だったと、人々が振り返るような気がしてならない。その時、「どこでもフィットネス」の風潮は、過ぎ去つた過去の笑い話となるのか、いや、さらにストイックに進化しているのではないだろうか。

(やまぐち ゆみ)

財団法人日本交通公社の調査研究小史（その1）

——観光計画を中心に

財団法人日本交通公社 研究調査部長

梅川 智也

はじめに

一九六三年（昭和三十八年）に制定された観光基本法が四十四年ぶりに全面改定され、観光立国推進基本法が今年一月より施行されました。^{*}財団法人日本交通公社（以下、当財団）は、同六三年に株式会社日本交通公社を分離し、観光業界における専門研究機関となりました。そこで、ほぼ同じ歴史を持つ当財団の主要事業の一つである調査研究事業について年代を追って振り返ってみたいと思います。

この小史は日本人の旅行動向・志向という需要側の^{*}基礎的調査を踏まえ、民間による観光事業のあり方・観光開発の手法、自治体による観光振興・ビジョンづくり、広域観光ルートの方策定、観光の需要予測、国の観光政策に対する支援に至る、当財団が独自に築き上げてきた観光分野の調査研究の軌跡であり、いわば

日本の観光研究の歴史とも重なるものと言えます。

一九六〇年代——観光研究に対する模索が続く始動期

一九六三年の観光基本法制定の翌年、一九六四年（昭和三十九年）は、海外渡航の自由化、東京オリムピックの開催、名神高速道路の開通、東海道新幹線の開通などが国の観光にとってエポックとなった年です。この時期に当財団が旅行部門を分離し、旅行業から観光分野における専門調査研究機関として新しくスタートを切ったことはまさに時節を得たものと言えます。当財団が公益性の観点から、国際親善の増進と国民観光の健全な発展のために何をすべきか模索が続いた時代でした。

この時期は、まず、海外の旅行会社（アメリカン・エクスプレス社、ワゴン・リー社など）

に関する調査や欧米（OECD加盟国）における観光事業の概況を翻訳するなど自主研究に着手したようです。

受託調査は、奥日光、霧島、別府、西伊豆、白浜、富士山麓などにおける民間からの宿泊施設整備に関する調査が年間数本程度ありました。日本観光協会などを中心に全国的に観光診断が行われていた時代にあつて、当財団独自の調査手法や計画手法を模索していた時代でした。

そうしたなかで一九六六年（昭和四十一年）に故伊藤善市・東京女子大学名誉教授（元当財団評議員）のご指導のもとで実施した「観光産業の経済効果——小豆島における理論的実証的研究」は、わが国で初めて本格的な観光産業の地域経済効果について研究したもので、当財団が現在TSA（ツーリズム・サテライト・アカウメント）に先進的に取り組む契機ともなった歴史

表1 戦後の観光関連法と全総計画（戦後～1970年代）

年月	観光関連法規・観光関連事業・全総計画
1948(昭和23年)	旅館業法／温泉法
1949(昭和24年)	通訳案内業法の公布(6月) 国際観光事業の助成に関する法律の公布(12月) 国際観光ホテル整備法の公布(12月)
1950(昭和25年)	別府国際観光温泉文化都市建設法の公布(7月) 伊東国際観光温泉文化都市建設法の公布(7月) 熱海国際観光温泉文化都市建設法の公布(8月) 奈良国際文化観光都市建設法の公布(10月) 京都国際文化観光都市建設法の公布(10月) 国土総合開発法／文化財保護法
1951(昭和26年)	松江国際文化観光都市建設法の公布(3月) 松山国際観光温泉都市建設法の公布(4月) 軽井沢国際親善文化都市建設法の公布(8月) 出入国管理令／旅券法／検疫法／道路運送法
1952(昭和27年)	旅行斡旋業法の公布(7月)
1954(昭和29年)	国民保養温泉地の指定開始(厚生省→環境庁)
1956(昭和31年)	国民宿舎(国立)の整備が始まる(環境庁)
1957(昭和32年)	自然公園法
1958(昭和33年)	公立青年の家(文部省) ユースホステルの整備が始まる(運輸省)
1959(昭和34年)	国立青年の家整備開始(文部省) 国設スキー場整備始まる(林野庁) 国民宿舎(民営)整備開始(環境庁) 日本観光協会法／国際観光振興会法の公布(3月)
1961(昭和36年)	国民休暇村の整備始まる(環境庁) 厚生年金会館の整備始まる(社会保険庁)
1962(昭和37年)	全国総合開発計画閣議決定(10月)
1963(昭和38年)	観光基本法の公布(6月)
1965(昭和40年)	公立少年自然の家整備開始(文部省)
1966(昭和41年)	国設キャンプ場整備開始(林野庁)
1967(昭和42年)	国民保養センターの整備開始
1968(昭和43年)	観光施設財団抵当法の公布(6月)
1969(昭和44年)	新全国総合開発計画閣議決定(5月) 自然休養林の整備始まる(林野庁) 長距離自然歩道の整備が始まる(環境庁) 国営公園の整備が始まる(建設省) 簡易保険レクリエーションセンター整備開始(郵政省)
1970(昭和45年)	国民休養地の整備始まる(環境庁)
1971(昭和46年)	青少年旅行村の整備始まる(運輸省) 保健保安林生活環境保全林の指定開始(林野庁)
1972(昭和47年)	森林総合利用促進事業始まる(林野庁) 自然休養村の整備開始(農林水産省) 新山村建設モデル事業始まる(国土庁) 広域公園の整備始まる(建設省) 国民年金保養センター整備開始(社会保険庁)
1973(昭和48年)	大規模観光レクリエーション地区の整備開始(運輸省) レクリエーション都市の整備が始まる(建設省) 総合森林レクリエーションエリア整備開始(林野庁) レクリエーションエリア整備開始(自治省) 山村振興モデル事業始まる(国土庁) 大規模年金保養基地の整備が始まる(厚生省) 厚生年金休暇センターの整備始まる(社会保険庁) 勤労者いこいの村の整備始まる(労働省) 大規模自転車道の整備が始まる(建設省) 野鳥の森の指定が始まる(環境庁) 勤労者いこいの広場の整備開始(労働省)
1974(昭和49年)	オリエンテーリングコース整備開始(総理府)
1975(昭和50年)	青少年の森整備始まる(林野庁) 国立少年自然の家整備始まる(文部省) 飛鳥周遊歩道の整備が始まる(建設省) 保健保安林施設の整備始まる(林野庁)
1976(昭和51年)	簡易保険キャンプセンターの整備開始(郵政省) 簡易保険総合レクリエーションセンター整備開始(郵政省)
1977(昭和52年)	昭和の森整備開始(林野庁) トリムコース整備開始(総理府) 第三次全国総合開発計画閣議決定(11月) 国際観光文化都市の整備のための財政上の措置等に関する法律の公布
1978(昭和53年)	農村地域農業構造改善事業(緑の村)開始(農林水産省) 中規模観光レクリエーション地区(家族旅行村)開始(運輸省) グリーンスポーツ施設の整備始まる(文部省)
1979(昭和54年)	農村地域定住促進対策事業始まる(農林水産省) 21世紀の森整備開始(林野庁) 山村地域若者定住環境整備モデル事業始まる(国土庁)

的な研究として特筆すべきものでした。

地域の観光計画のバイブルとなったのが、一九六八年（昭和四十三年）に（社）日本観光協会と鈴木忠義・現東京工業大学名誉教授（当財団評議員）らが策定した「草津観光開発基本計画」で、当財団も調査に参画しています。温泉街と草津高原の開発、適正規模論などにも触れており、田村剛・林学博士などが想定した高原リゾート都市の具体的な姿が提示されています。

一九七〇年代——旅行の大衆化に対応した観光研究の時代

この時代は、高度経済成長が続き、新全国総合開発計画（新全総・昭和四十四年策定）のもとで、高速交通体系の整備と大規模開発が指向され、観光振興、観光開発に関する調査が多数行われました。六〇年代からの試行錯誤のなかで、当財団としての新たな調査手法、独自の観光計画論の基盤が築かれていきました。

一九七〇年（昭和四十五年）の大阪万国博覧会の開催は、マイカーブームと相まって家族旅行の普及が急激に進みました。

この時代の調査研究テーマとしては、観光資源の評価、都道府県レベルの観光計画、離島における観光振興、広域観光振興計画、森林レクリエーションの振興、スキー場開発計画、需要予測、街並み保存などです。一九七一年（昭和四十六年）から三カ年をかけて実施した建設省道路局からの委託調査「観

表2 戦後の観光関連法と全総計画（1980年代～）

年月	観光関連法規・観光関連事業・全総計画
1980（昭和55年）	第三期山村振興農林漁業対事業始まる（農林水産省）
1987（昭和62年）	第四次全国総合開発計画閣議決定（6月） 総合保養地域整備法の公布（6月）
1992（平成4年）	地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律の公布（6月）
1994（平成6年）	国際会議等の誘致の促進及び開催の円滑化等による国際観光の振興に関する法律の公布（6月） 農山漁村滞在型余暇活動のための基礎整備の促進に関する法律の公布
1997（平成9年）	外国人観光客の来訪地域の多様化の促進による国際観光の振興に関する法律の公布（6月）
1998（平成10年）	第五次全国総合開発計画閣議決定（3月）
1999（平成11年）	「観光産業振興フォーラム」の発足
2000（平成12年）	国民の祝日に関する法律の一部改正法の施行 高齢者、身体障害者の公共交通機関を利用した移動の円滑化の促進に関する法律（交通バリアフリー法）の公布
2001（平成13年）	祝日三連休化法成立 「（社）日本ツーリズム産業団体連合会」の設立

「光交通資源調査」は、わが国の高速交通体系の計画策定にあたり、観光流動の重要性から、全国の観光資源を、人気投票など主観的な評価ではなく客観的に評価するという趣旨で実施されたものです。その成果である約八千件の評価結果「観光資源台帳」は、地域の観光ポテンシャル評価や広域観光ルートの検討などの基礎情報として現在でも活用されています。また、現在ではA級以上の優れた観光資源を写真集『美しき日本』として刊行しています。

一九七三年（昭和四十八年）に策定された「山形県総合観光基本計画」は、一九八五年（昭和六十年）を目標年次とし、土地利用計画、交通計画、各地区の基本的開発方向と基本方針を明示し、観光資源評価をベースとした県レベルの観光計画論を確立したエポック的な報告書となっています。

「津和野―保存とまちづくり」は、当財団の観光文化振興基金を活用した本格的な自主研究で、一九七五年（昭和五十年）に策定されました。当時はデイスカバー・ジャパン・キャンペーンの影響で小京都・津和野は急激に観光客が増加していました。観光開発と町並み保存のバランスをどうとっていくかが主要なテーマとなっていました。観光事業者だけでなく、幅広く住民の意見を聞きながら調査を進めるといった手法が確立したのも、この時代からだと思えます。

そして、当財団が三カ年をかけて策定したのが一九七七年（昭和五十二年）の「草津町社会開発調査」です。ちょうど日本がオイルショックを経験し、これまでのように右肩上がりの高度成長が見込めなくなった時代で、今後、草津町がどういう将来方向を描くべきかが主要なテーマとなっていました。そこで打ち出されたのが、「住民参加」という概念でした。計画を

策定していく過程そのものが町づくりの第一歩であり、そして町づくりは結局「人づくり」に帰結するという、今でも通用する理念が示されています。

さらに、この時代を代表する研究が、一九七五年から三カ年をかけて実施した「観光の需要予測」です。（財）日本船舶振興会からの補助を（社）日本観光協会が得て、当財団が作業を担当しました。その目的とするところは、観光レクリエーション空間計画策定に資する予測値の提供であり、最終結論として十年後の発生量および県際[※]OD量を推計しています。その後は、ここまで大規模な観光に特化した需要予測に関する研究は行われていません。

一九七〇年代最後にご紹介するのが、当財団から株式会社日本交通公社の分離という組織改正から十五周年を迎え、当財団の記念事業として出版された『観光の現状と課題』です。その前年に発足した「観光文化資料館（現在は



観光の現状と課題

旅の図書館」に引き続き事業と位置づけられ、一九七八年（昭和五十三年）から二カ年をかけて全研究員が総力を挙げて取り組んだもので、全九百ページに及ぶ観光分野のバイブルとなっています。

一九八〇年代——観光が地域振興に果たす役割が認識されるなかでの観光研究の時代

一九七〇年代半ばから二度にわたる石油危機により、それまでの高度経済成長に終止符が打たれ、日本列島改造論を背景とした山岳高原や海浜部での別荘地やペンション村などの開発ブームにブレーキがかかります。一九七七年には福田内閣のもとで閣議決定された第三次全国総合開発計画（三全総）が策定され、人間居住の総合的環境の整備を基本目標とし、地方の時代をキーワードとして「定住構想」が打ち出され、定住圏におけるレクリエーション機能の充実がテーマとなりました。一九八〇年代の後半からは、わが国の景気が上向き、バブル経済へと入っていきます。

そうしたなかで、離島や過疎地域、農山漁村、地方都市などにおける地域振興にとって観光の果たすべき役割が大きいたくがようやく認識さ

れ始めたのが一九八〇年代であったとも言え、急速に受託調査の数が増加してきました。

当財団が一九八〇年代に観光基本計画策定のお手伝いをした市町村は、出石町、清水市、山形市、網走市、釧路市、浦安市、米沢市、酒田市、上士幌町、下甑村、竹富町、長洲町、大鰐町、朝日村、米子市、那珂湊市、仙台市、石垣市、長崎市、守山市、大子町、五城目町、津山市、川口市、川越町、石田町、勝本町、小坂町など数多くあり、その後、二次、三次の計画策定のお手伝いをしたところもあります。

また、広域観光計画も一九八〇年代に入ってから急速に増加します。例えば静岡市周辺の合併を前にした「駿河地域観光振興基本構想策定調査」、瀬戸大橋の架橋を想定した「瀬戸大橋架橋に伴う交通改革に対応する広域観光と地域づくり」、九州横断国際観光ルートの考案並びに地域整備調査、河川流域の観光振興を考える「四万十川流域振興計画」や「成羽川上流地域観光振興計画」など、そして「東北観光の問題点と誘客のための方策」、「おくの細道を活かした地域整備調査」などです。個々の宿泊施設の経営に関する調査から温泉観光地全体の将来ビジョンを策定するといった調査も増加していきます。城崎温泉、宇奈月温泉、田代温泉、湯

河原温泉、層雲峡温泉、浅虫温泉、上諏訪温泉、浅間温泉、小野川温泉などです。

ビーチやスキー場をはじめとするリゾート開発計画、ウォーターフロント計画も多数策定されました。「沖縄観光振興に関する総合計画及び国際的海岸リゾート開発整備調査」は、国際リゾート・ハワイを徹底的に比較研究し、沖縄が国際的なりゾートとして発展するための方策を検討したものです。「北海道における国際的観光レクリエーション基地」も国際的に通用するスキーリゾートの構想計画を策定したものです。

台湾・懇丁風景地区、中国・海南島、バリ島・又サドウア、マレーシア、タイなど海外の途上国における外貨獲得のための観光計画、リゾート計画にも関与しました。

当時、国鉄の民営化に伴う鉄道の利用促進調査―三陸鉄道、松浦線、二股線なども特徴的な調査でした。〔次号に続く〕

（うめかわ ともや）

※1：当財団は、一九二二年（明治四十五年）に「ジャパン・ツーリスト・ビューロー」として設立されました

※2：（株）日本交通公社（現（株）ジェイティービー）からの委託による需要側の基礎的調査（旅行関連調査）が数多く行われていました

※3：ODDとは、Origin（出発地）Destination（目的地）



旅の図書館

新着図書紹介

「市場経済化が急速に進行するなか、不況克服を名のって断行された、いくたびかの経済改革は民衆に熱く期待されたが、結果として人々を苦しめていくばかりだった…(中略) 彼らは、財政的に破綻しているこの国の現実とは別に、豊かな生き方と文化を求めていた。だから、この時代、エンターテインメント・コンテンツこそがビジネスたりえた(原文)」。この文章から、これは現代社会の話だろうと感じ取られたのではないだろうか。

これは、「否、江戸・中期の世相である…」とくんだりから始まる『ジャパングルと江戸文化』(奥野卓司著、岩波書店)。書き出しから読者を引きつけてくれる「カッコいい(クールな?)」本なのである。

近年、海外でマンガ、アニメ、Jポップなど日本のポップカルチャーが「ジャパングル」と呼ばれ高い評価を受けている。一方、国内でも歌舞伎や落語、人形浄瑠璃(文楽)などの江戸時代からの「伝統芸能」が幅広い世代で好まれ、歌舞伎ブームと呼ばれるほど人気を集めている。

本書は、「現代のジャパングルの原点が江戸時代の日本が編み出したコンテンツにある…」と、江戸文化を単なる伝統文化としてではなく、歌舞伎とアニメ、浄瑠璃とJポップ、浮世絵とイ

ラストレーション、花札、かるたとビデオゲーム、からくりとロボット、生類憐れみの令とペットブームというように、現代の市場経済の中で動く魅力的な素材と比較してとらえ直している視点が非常に新鮮である。

現代社会に似たありさまが、江戸時代中・後期の世相・風俗に見られたかを考察し、その様相を今日と比較することで、江戸ブームの文化的意味を、現代社会のコミュニケーションの再生からエンターテインメントビジネス、オタク文化(萌え)など、江戸文化が形を変えて現代社会に受け継がれてきていることで検証している視点も興味深い。

江戸、上方の人たちの価値観について、「人生のプライオリティの基準をそれぞれが自主的にもち、そのプライオリティの上位におかれたのは、金儲けではなかった。金が人生の目標ではなく、自分と自分の近い者の楽しみのために稼ぐものであった」と書かれている。そこそこ稼いで今を楽しもうとする「クールな江戸町民」の価値観は、当時と同様に自由と管理の両義性を持つ近未来の社会の生き方として、一つの示唆を与えていると著者はみている。

こうした江戸町民のクールな価値観が今日、歌舞伎や文楽などの伝統芸能を通じて幅広い世

代に受け入れられ、改革の名のもとに格差社会がますます広がる日本で、多くの人たちが江戸町民と同様に「おだやかな生活」を望んでいる表れとも言えるのではないだろうか。

この本で著者が江戸文化をテーマにしたのは、歌舞伎や文楽、落語などの江戸時代の文化が好きだったから、と書いているが、それだけではない。今日、ユーチューブなどで紹介されるブームとなっている歌舞伎、落語やグーグルの江戸古地図サービスの動きなど、日本独自の文化をデジタル化することで、世界に発信しようと呼びかけている。まさに、ジャパングルの広告塔(クール・オタク)である。

「江戸時代は過去にあったのではない、私たちのすぐ未来にあるのだ」という著者の言葉は、日本文化を見直してほしいという、強いメッセージとも取れる。(江口哲夫)



四六判 238 ページ
定価 2,310 円
岩波書店

定期刊行物

- 旅行年報 (年更新、毎年九月発行)
過去二年間の旅行に関する動向と展望をデータ中心に解説。
- 旅行の見通し (年更新、毎年一月発行)
今年一年間の国内旅行・海外旅行などの量的見通しと質的变化。

旅行者動向 (年更新、毎年七月発行)

国内・海外旅行者の意識と行動について実施する当財団「旅行者動向調査」の分析結果をビジュアルに解説。「二〇〇七」では、「いまどき若者の旅行マーケット」「旅行大好き」を探る」を特集。

観光文化 (年六回、奇数月二十日発行)

旅や観光の文化に関する当財団の機関紙。

Market Insight (日本人海外旅行市場の動向)

(年更新、毎年七月発行)

日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。〇六年より発行。

観光読本 (二〇〇四年六月発行)

東洋経済新報社の読本シリーズ。一九九四年の初版刊行から十年を経て、内容を大きく見直した改訂版。観光全般に関する客観データや現象を解説。またそれらに基づく分析・提言など。

その他刊行物

●美しき日本

日本の美しい観光資源を紹介する写真集。わが国を代表して世界にアピールでき、わが国の基調となる観光資源三百九十一件を選定し、写真と解説文で紹介。外国語版(英語・中国語・韓国語)「Beautiful Japan」も発行。

●エコツーリズム さあ はじめよう！

エコツーリズムを目指すすべての人に向けて環境省が編集し、当財団が発行した手引書。

※刊行物に関する問い合わせ、冊子をお求めになりたい方は

財団法人日本交通公社 観光文化事業部まで。

電話：03・52608・4704 <http://www.jtb.or.jp>

次号予告

●来年は「源氏物語」誕生千年という記念すべき大きな節目。次号の特集は、日本が誇る古典文学の精華「源氏物語」の価値や今日的な意義を尋ね、千年紀に向けた取組を紹介します。

調査研究たより

●少子高齢化社会の旅行需要拡大策として「滞在」が目ざれています。しかし、観光地の旅館は一泊二日旅行により発達したため、豪華な会席料理の提供が前提とした事業構造(設備・人材・収支計画)が出来上がってしまっています。しかし、滞在を促進するためにはリーズナブルで自由に食事を選べる必要とされます。

●そのための一つの切り口が泊食分離販売(客室と食事を別々に販売)ですが、一旅館だけでこれにチャレンジすることは容易ではありません。そこで国土交通省では地域全体で泊食分離販売に取り組み実証実験を昨年度より開始し、当財団はそのコーディネーター役を受け持っています。泊まる場所(旅館)と食事場(旅館の食事処や街中の居酒屋等)をその時の気分で選ぶ、予算に応じて組み合わせる、こんな自由度の高い食事選択ができれば一泊利用でも使いたくなりますね。

●今年の泊食分離実証実験は作並温泉、館山寺温泉、有馬温泉、平戸市で行われます。それぞれが知恵を絞って滞在型メニューと食の魅力を提供しますので、各温泉地観光地のホームページ等に注目ください。(大野)

編集後記

◆童話「銀河鉄道の夜」「風の又三郎」や詩「雨ニモマケズ」などの名作で多くの人々から親しまれ敬愛されている宮沢賢治が、三十七年の短い生涯の間に文学のみならず宗教、農業、地質学、音楽、絵画、天文学など多方面でたぐいまれな才能を発揮したことに驚かされます。

◆賢治作品の獨創性は自然との大いなる交感力にあると評価されていますが、盛岡高等農林学校で学んだ科学的知識とイーハトーブの山野を渉猟した経験が礎になったと思慮されます。地球環境が問われる今日、賢治の業績はますます注目を集めることでしょう。命日の九月二十一日には賢治祭が開催されます。賢治が体現した岩手の精神風土を感じていただけましたら幸いです。

◆前号より新連載「F・プリンクリーの「美しい国ニッポン」」が開始されています。本誌176号特集「アイルランドの誘惑」に「明治の親日家プリンクリーのダブリン」をご寄稿いただいた沢木泰昭氏が人物像を掘り起こします。短期の六回連載の予定ではありますが、観光庁の発足が計画され観光振興が国家事業として一層推進されるようとしている今日、明治日本の国際化・近代化に多大な貢献を果たしたプリンクリーの足跡に学ぶことが多いと期待されます。(宇八)



観光文化 第185号

第31巻5号通巻第185号

発行日 2007年9月20日



発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内 1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎ 03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内 1-8-2
第2鉄鋼ビル 旅の図書館内
〒100-0005 ☎ 03-3214-6051
<http://library.jtb.or.jp>

編集人：外川宇八

発行人：新倉武一



印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

ISSN 0385-5554